



Seishu The Kyoto University Library Bulletin

# 静脩

2002年3月

Vol. 38, No. 4

## 宮崎市定コレクション 西洋刊の地理書と古地図

名誉教授 礪波 護

平成13(2001)年6月、京都大学附属図書館は総合博物館の開館記念協賛企画展「近世の京都図と世界図」を博物館北棟の展示室で開き、A4判80ページからなる美しい『近世の京都図と世界図 大塚京都図コレクションと宮崎市定氏旧蔵地図』と題する解説図録を発行しました。この企画展は、図書館が最近寄贈を受けて貴重書庫に別置することになった二つのコレクション、すなわち京都在住の実業家、大塚隆氏の収集による江戸期から近代にいたる京都に関する地図の体系的コレクションと、京都大学文学部の東洋史学教室を長年に亘って主宰された故宮崎市定名誉教授(1901年~95年)が、1936年から38年まで、文部省在外研究員としてパリに滞在中に蒐集した西洋古版地図及び地図帳の中から、逸品を選んで公開したものでした。

「大塚京都図コレクション」については、寄贈に尽力された金田章裕教授が、展覧期間中に「近世京都図の特性」と題して講演され、その要旨は本誌『静脩』の前号に掲載されました。「宮崎市定コレクション」については、近畿地区国公立大学図書館協議会との共催で9月21日にAVホールで開催の、平成13年度第一回附属



図書館講演会で、私が話すことになりました。

文化功勞者として顕彰され、『宮崎市定全集』全25巻(岩波書店刊)の著者として知られる、東洋史家の宮崎は、地理学や地図史にも関心を持ち、第二次大戦直後の一時期には地理学講座の教授を兼担しますが、地理学教室との縁は、京都大学に入学する大正11(1922)年にまで溯ります。松本高等学校の学生時代に政治家を志していた宮崎が、京都大学の文学部を受験して東洋史を専攻するようになったのは、同文学部の地理学を卒業した浅若晃教授の適切な助言によるそうです。京都における下宿先も、浅若が住んでいた吉田山東麓の浄土寺町でした。

大学を卒業して教室の副手となり、研究者の道を進んだ宮崎は、恩師である東西交通史家の桑原隲蔵に指示され、ゲオルク・ヤーコブ著の『西洋に於ける東洋の影響』の抄訳を作成し、史学研究会の『史林』に3回連載されました。欧米の優越感を少しも感じさせないヤーコブの論考から受けた学恩は大きかった。一年志願兵として、兵役の義務を終えた宮崎は、岡山の第六高等学校教授をへて、昭和4（1929）年春に第三高等学校教授に着任しました。いずれも桑原隲蔵の配慮でなされました。

三高教授として、東洋史だけでなく、西洋史の授業を担当した宮崎は、京大文学部の講師として授業を担当しました。その際、昭和7年度から東洋史教室で宋代の制度や党争などを講義したばかりか、翌8年度から三年間、地理学教室で「支那地理書講読」の授業を受け持ち、西洋刊の地理書や古地図への関心を深めました。

「支那地理書講読」の受講生名簿の中に、後に著名な地理学者となる米倉二郎・織田武雄や、中国地理学を専攻する日比野丈夫らの名前が見えるのです。



三十歳代の半ばに、三高教授から京大文学部の助教授に転じた宮崎は、文部省在外研究員として滞在する国にフランスを選びました。宮崎は二年間を超えるフランス留学中、機会を見つけてヨーロッパ各地を旅行し、とくに1937年9月から二カ月半に亘って西アジア各地を歴遊した結果、史上における西アジアの先進性を確信し、帰国後に「東洋のルネッサンスと西洋のルネッサンス」といった東西交渉史に関する論考を執筆し、紀行文『菩薩蛮記』を出版します。

宮崎は、パリ滞在中、ヨーロッパで出版された、イエズス会士の編纂にかかる中国に関する地誌や報告書といった、歴大な古書を購入するかたわら、パリ市内に何軒となくある銅版画専門店やセーヌ河岸の古本店で、稀覯本の地図帳Atlasの外、地図帳から出たハナレものの地図Mapを蒐集しました。たとえば、イエズス会士であるマルティノ・マルティニ（衛匡国）の1655年刊『中華新地図帖』、デュ・アルドの1735年刊『中華帝国全誌』全4冊、1638年刊のリンズホーテン『航海誌』のフランス語訳本、1897年にストックホルムで刊行のノルデンシェルド『ペリプルス』英語版といった西洋刊の地理書の稀覯本、1513年刊のエシュラー/ユーベリンの「現代インド図」、ともに1550年刊のミュンスター「アメリカ図」と「アジア図」、1584年刊のヨルゲ「中国図」、1608年頃刊のオルテリウス「アジア図」、1658年刊のヤンセン「中国図」です。宮崎がこれらの地図帳や銅版古地図の収集に鋭意努力したのは、渡欧直前まで地理学教室の授業を担当して、西洋におけるアジアの地図史に強い関心を抱いていたからです。

宮崎は、これらご自慢の洋書や地図帳・地図には「宮崎氏滞欧採蒐書印」と刻した朱印を捺し、それらの地図を眺めて楽しむだけでなく、折にふれて地図を活用した緻密な論考を発表して、地図の変遷からみた東西交渉史論を展開したのです。ヨーロッパで刊行された中国地図帖の双璧は、ブラウの地図帖として有名な、

マルティノ・マルティニの『中国新地図帖』と、ダンヴィルの地図帖として知られるデュ・アルドの『中華帝国全誌』全4巻の随処に挿入された、42葉の近代的な地図ですが、宮崎はそれらの両方を購入しています。

チロル生まれのイエズス会士マルティニは、1643年に多数の宣教師をともなって中国に入り、明末清初の動乱期に中国各地を巡回して貴重な見聞記を書くかわら、主要都市の位置を測量し、ローマ法王庁に帰る途中に立ち寄ったアムステルダムで、地図学者ヤン・ブラウの大地図集『新地図帖』の一部として、1655年に『中国新地図帖』を公刊しました。これは、ヨーロッパにおいて出版された最初の中国地図帖です。明の陸応陽の『広輿記』を底本として作り、ダンヴィルの『中国新地図帖』が出るまで、ヨーロッパで最も信頼すべき中国の地理書として尊重されました。

パリ生まれのデュ・アルドは、イエズス会に入り、もっぱら編纂の仕事に従事しました。かれが在中国の宣教師から送られてきた書簡・研究などをたくみに編集して『中華帝国全誌』を出版した際、パリの王室付地図師のダンヴィルが作成した多数の中国地図を挿入しました。ダンヴィルの地図は、清の康熙帝の命によって、1707年から10年の歳月をかけ、イエズス会士を中心に近代的な実測によって作成された中国全図『皇輿全覽図』に基づき、その実測は、北京を通過する子午線を基準経度と定め、中国本土はもとより、辺境の各地を含む約700地点の経緯度を天文測量などによって決定したのです。『中華帝国全誌』は1735年にパリで出版され、フォリオ判全4冊からなる巨帙でした。翌年にハーグから縮刷のクォールト判として出された際、42葉の地図はすべて省かれましたが、その翌1737年に、同じハーグの書肆から別冊の『中国新地図帖』が刊行されました。これが一般にダンヴィルの地図帖と呼ばれているものですが、もともとはパリ刊のデュ・アルド『中華

帝国全誌』の随処に挿入された地図類を一冊に纏めたものです。

今からちょうど百年前、宮崎が生まれた明治34(1901)年の、12月16日付『大阪朝日新聞』に、宮崎の恩師の一人で、当時は朝日新聞社の論説記者であった内藤虎次郎(号は湖南。1866-1934)は、黒頭のペンネームで、「京都大学図書館記念展覧会」と題する詳しい観覧記を書いています。この文章は筑摩書房刊『内藤湖南全集』全14巻には未収録ですが、内藤湖南を特集した『書論』第13号(1978年)の全集補遺に収められています。その4年前に創設された京都帝国大学は、勅令では法・医・理工・文の各分科大学を有するものとされながら、当時東京帝国大学においてさえ文科大学の学生は定員に満たなかったということもあり、京都の文科大学だけは開設が遅れていましたが、大学附属図書館はすでに開館していたのです。

この図書館観覧記によりますと、その開館第二周年記念として去る八日より三日間、京都地理に関する図書の展覧会が開かれたので、内藤が初日に参観したところ、今しも関西文庫協会例会の最中であって、富岡謙三が図書館に対する希望を述べた演説をしていましたが、その趣旨は、寺院に於ける古板本、古抄本の收拾を京都大学に望み、字書索引の整備を各図書館に望んでいたそうです。

参観記の終わりに、この日の来観者は富岡鉄斎ら考古好事の老大家を始めとして、青年の文士もあって、ここかしこで談論湧くがごとく興があった、と記したのち、展覧以外の珍書としては、新宮涼庭の寄贈にかかる書の一であるとして、島文次郎館長らが示したのは、西暦1737年パリ(正しくはハーグ)出版の清国地図で、著者の名をダンヴィユ(D'Anville)という、と述べていたのです。奇しくも百年後、附属図書館の主催によって京都の地図に関する大塚京都図コレクションと宮崎市定コレクションの優品の展覧が行われ、西暦1737年パリ(正しくは八

ーグ)出版の清国地図ではなく、デュ・アルドの1735年パリ刊『中華帝国全誌』全4冊が展覧されました。そして関西文庫協会の後身に当たる、近畿地区国公立大学図書館協議会との共催で、今回の講演会が開かれたこととなります。

第二次世界大戦の時期、文学部の地理学講座を主宰した小牧實繁教授は、ドイツ地政学の学風に共鳴し、『日本地政学宣言』(1940年、弘文堂刊)などを出版し、特殊講義にも「日本地政学」を講じました。敗戦後、小牧教授と室賀信夫助教授らが辞職した際、宮崎は地理学教室の主任となって同教室の再建に努め、自由主義者の織田武雄を助教授に招請したのです。

宮崎は、織田武雄『地図の歴史』(1973年、講談社刊)の序において、「十六世紀のオルテリウスのアジア地図などには、奇怪な形状をした日本・朝鮮が、いとも自信なげに描かれている。しかし知的には臆病そうに見えても、それは同時に逞しい意志を中に秘めている。いかなる困難をも冒し、どんな犠牲を払ってでも未知の世界に挑戦し、実態を極めねばやまぬぞという船乗りたちの凄まじい意欲の成果が、その裏に潜んでいるのである。さてこの地図を前にした当時の人たちの間には、一航海ごとに巨万の富を手に入れ、あこがれの貴族の地位に近付こうと野心を燃やす商人もあつたであろう。また、そんな成功者を見習って一獲千金の夢を抱き、これから危険な遠征に旅立とうとする無一文の青年もおつたであろう。その傍らには、地図に描かれた吞舟の怪魚を指さして、息子の冒険を思い止まらせようと、涙ながらにかきどく母親がいたかも知れない。」と書いていました。

宮崎が言及した、オルテリウスのアジア地図(1608年頃刊)も、宮崎市定コレクションに含まれています。今回の図録『近世の京都図と世界図』で綿密な解説をしたための京都大学名誉教授の應地利明さんは、織田の高弟であるとともに、学生時代から宮崎の学風を景仰し、論著を讀破してきた方ですが、このオルテリウスの

地図の解説で、「アジア全域が黄色く彩色されていて書き込みが容易なためか、宮崎は、中国から西域へと至る多くの欧文地名に赤インクで漢字地名を添記していて、この地図を楽しみつつ読んでいた様子を彷彿とさせる。宮崎にとっては、たとい古地図でも自由に書き入れをおこなうなど、それらは研究と趣味のための私的資料であって、決して骨董品ではなかったのである。その書き入れに導かれて地名をたどると、マルコポーロが帰国の際に出立した……」と書いています。今では一枚が数十万円もする古地図のあちこちに、朱筆でかきこみをしているのです。宮崎が蒐集した古地図は、あくまでも研究と趣味のためのものでした。

八十歳をすぎた頃、宮崎は雑誌記者の質問に対し「よく、京都大学の学問のやり方は趣味的でいかん、と批判されますが、私は逆に、趣味的にやるのが本当の学問だと思っている。それを実証したのが、私の『論語の新研究』ではなかったでしょうか」(「論語読み」の愉しみ)と答えています。西洋刊の地理書や地図も、同じやり方で対応したのでした。

宮崎がパリで西洋刊の地図を採集していた時のライバルは、朝日新聞社パリ支局長の渡辺紳一郎(1900-78)でした。渡辺の地図蒐集の苦心談は、渡辺の講演録である「古地図あれこれ」(『ピブリア』第32号、1965年)に詳しく描かれている。古地図・地球儀・天球儀特輯と銘打たれた『ピブリア』の同号には、織田の講演録「世界地図の発達」や、宮崎の論文「マルコ・ポーロが残した亡霊 カタイ国が消滅するまで」が掲載されています。また平成9年6月に神奈川県立歴史博物館の開館30周年記念特別展「世界のかたち日本のかたち 渡辺紳一郎古地図コレクションを中心に」が開かれ、同名の解説図録が刊行されています。

宮崎市定コレクションの地図のうち、1550年刊のミュンスター「アメリカ図」のカラー複製は、大型図録の織田武雄・室賀信夫・海野一隆

